

# さがみはら教育

2026. 3 No. 170

## 多様な教育的ニーズに応じた 支援や指導のあり方



寄稿文

玉川大学 学生支援センター  
障害理解教育推進アドバイザー

安藤 正紀 氏

「多様な教育的ニーズに応じた支援や指導のあり方」とは？

特集1 「多様な教育的ニーズに応じた支援や指導のあり方」とは？

特集2 相模原市の取組～子どもたちにつながる支援・取組の視点から～

相模原の研究 ～本市教育における課題を踏まえた研究実践～

●研究推進事業:本市教育における課題を踏まえた各校・中学校区での研究実践

●教育研究員研究:本市の学校教育の向上をめざした教育研究員による研究実践

文部科学省委託事業

リーディングDXスクール事業(中野中学校区)・生成AIパイロット校事業(中野中学校)の取組

## 特集 多様な教育的ニーズに応じた支援や指導のあり方

特集 1	「多様な教育的ニーズに応じた支援や指導のあり方」とは? …… 2
	<u>寄稿文</u> 玉川大学 障害理解教育推進アドバイザー 安藤 正紀 氏

## 特集 2 相模原市の取組～子どもたちにつながる支援・取組の視点から～

編集の趣旨	7
(1) 共に学び、共に生きる ～夜間学級が紡ぐ「学習と支援」～ (大野南中学校分校)	8
(2) 多様な教育的ニーズに応じた支援 (支援教育課)	10
(3) ポジティブ行動支援について (教育相談課)	12
(4) 不登校児童生徒の学習指導・支援について (教育センター)	14

## 相模原の研究 ～本市教育における課題を踏まえた研究実践について～

編集の趣旨	16
-------	----

## ● 研究推進事業：本市教育における課題を踏まえた各校・中学校区での研究実践

支援教育の推進に関する研究 (旭中学校の取組)	18
学習指導・評価の充実に関する研究 算数 (桜台小学校の取組)	20
学習指導・評価の充実に関する研究 体育 (橋本小学校の取組)	22
キャリア教育の推進に関する研究 (田名中学校区の取組)	24
学習指導・評価の充実に関する研究 外国語 (相模台小学校の取組)	26
学習指導・評価の充実に関する研究 音楽 (鶴園小学校の取組)	27
学習指導・評価の充実に関する研究 学習評価 (相模丘中学校の取組)	28

## ● 教育研究員研究：本市の学校教育の向上をめざした教育研究員による研究実践

主権者として求められる力の育成に関する研究	29
上溝南小学校 吉田 耕一郎 総括教諭	
旭小学校 菊地 佑介 教諭	
麻溝台中学校 大岡 美来 教諭	
中沢中学校 武川 偉瑠 教諭	

文部科学省委託事業 ～リーディングDXスクール事業 (中野中学校区)・  
生成AIパイロット校事業 (中野中学校) の取組～ …… 31

バックナンバー	33
編集後記	34

## 巻頭言

### 「多様な教育的ニーズに応じた教育の提供」の実現に向けて

学校には、学習へのつまずき、発達の特性、不登校傾向、家庭環境を取り巻く様々な事情など多様な背景をもつ児童生徒がいます。そのような子どもたちに対して私たちはどのように関わっていけばよいのでしょうか。「子ども同士の温かな人間関係」と「保護者とも連携した大人の支援」の双方からアプローチすることで、全ての子どもが安心して自分らしく学べる環境を構築することができるのではないのでしょうか。

学級担任をしていた頃、ずいぶん前の話になるのですが……。

当時、私は、小学校3年生の担任で、クラスには予定の変更が苦手な男子児童がいました。1時間目の国語の授業で熱が入り、チャイムが鳴った後も授業が延びてしまいました。予定が変わることに不安を感じてしまう彼です。「先生、2時間目の算数はどうなりますか?」「国語は何時まで続きますか?」とパニックになり、泣き始めてしまいました。どうしたらいいだろう?私も同じように泣きたい気持ちでした。その時に彼の困り感に寄り添い、クラスの子もたちが「彼自身が、予定表の教科札を替えてはどうか?」と提案しました。私は黒板の横に、その日の予定を掲示するスペースと大きめの教科札を作りました。それから、何か変更があると「大丈夫だよ、自分で予定を替えてみて。」と友だちに促され、彼は自分の手で予定を替えるようになりました。それは、彼にとって「これはここで終わり。ここからは次。」と区切りをつけ、心を落ち着かせる大切な行動でした。私が何より感激したのは、友人たちの姿です。誰も彼を急がせることなく、心無い言葉を発する子もい

相模原市教育委員会

教育センター

所長 北村 綾



ませんでした。誰もが「彼には今、この時間が必要なんだ」ということを理解していました。納得して席に戻るまでのわずかな時間をクラス全体が温かい空気で包み込んで待っていたのです。「よし!できました。」と札を掛け替えて席に戻った彼の顔はとてもしっきりとして、その後も笑顔で活動することができました。自分で心を整える力をつけた彼と無言の優しさで支えた友人たち。子どもたちの成長と絆を感じ、胸がいっぱいになったことは忘れられません。また、保護者の方と家庭における様子と学校での様子を交換日記のように毎日伝え合いました。保護者との連携が、子どもの成長を見守る上で不可欠だということをこの時に改めて感じました。

「人には得意なこともあれば不得意なこともあるけれど、子どもも大人もお互いの苦手なことを理解することは簡単なことではない」という記事を目にしたことがあります。よいところだけでなく、苦手なことや困っていることも、その人のすべてを受け入れる気持ちを育むことが、支え合う風土を醸成することになるでしょう。また、「相手に思いを馳せる」という経験を積み重ねていくことは、子どもたちが今後関わっていく様々な人とより良い関係を構築するために必要なことだと思います。次期学習指導要領に向けた大きな柱の一つに「多様性の包摂」があります。学校が、全ての子どもにとって「安心できる居場所」であり「失敗を恐れず自分の可能性を試すことできる」かけがえのないプラットフォームであるために、私たちも先生方の創意工夫を全力で支え、ともに伴走していきたいと思っています。

## 特集Ⅰ 「多様な教育的ニーズに応じた支援や指導のあり方」とは？

現代の学校教育現場において、多様な背景や教育的ニーズをもつ子どもたちと向き合っていくためには、子ども一人ひとりがもつ可能性を最大限に引き出し、すべての子どもが安心して学び、成長できる環境を整えていくことが求められています。

そこで、今回は、「多様な教育的ニーズに応じた支援や指導」について、長年、本市支援教育ネットワーク協議会で委員長を務めておられる玉川大学の障害理解教育推進アドバイザー 安藤 正紀氏より、御寄稿いただきました。



玉川大学 安藤 正紀氏

### Ⅰ インクルーシブ教育より、インクルーシブ社会が先

学校の中だけでインクルーシブ教育と声高に叫んでいても意味がない、ということは言うまでもありません。ICF（国際生活機能分類）で示す、環境との相互作用で障害状況が流動的に変化するという社会モデルの意味が理解され、「助けたり、助けられたりする社会」であってこそそのインクルーシブ教育です。しかし、EU（欧州連合）やアメリカの情勢変化によって、多様性を認め、助け、寛容な社会の持続性に陰りが見えてきています。

平成19年度の学校教育法の改正により、特殊教育が特別支援教育になってから、特別支援学級在籍児童・生徒数は増加を続け、障害の多様化が進んでいます。例えば、知的障害学級2クラス、自閉症・情緒障害学級2クラス、肢体不自由学級1クラス、弱視学級1クラスの計6クラスに32名が在籍して、通級指導教室もあるといった学校が都市部でも地方でも増えています。

これは、1校で各障害に応じた支援を提供できるインクルーシブな状態になったと言えますが、一方、LD（学習障害）やADHD（注意欠如／多動性障害）等の児童が通常の学級から特別支援学級に移り、ある意味差別化が進んだとも言えま

す。さらに、不登校の児童生徒が増え、通常の教育からのさらなる差別化が進行しています。「本当にインクルーシブ教育をめざしてきたのか？」「個別対応」や「より専門的対応」の名のもと、通常の学級から特別支援学級への転籍が増え、通常の学級の等質化が進んだようにも思われます。どうやら、そんなに単純なことではなさそうです。確かに転籍も増えてきましたが、それ以上に通常の学級の多様化が加速的に進んでいるのではないのでしょうか。だからこそ、可能な限り、通常の教育と特別支援教育の一体化が必要なのではないのでしょうか。すべての多様性を包含できる柔軟な学校づくりが求められているのではないかと思います。

### 2 ライフステージで求められるもの

#### （1）現状と支援の概観

現在、通常の学級に在籍し、自力では解決することが困難な課題をもつ子どもたちの多くは、学習、行動、人間関係などの課題に加え、家庭生活や保護者等との調整を必要とする課題が複合的に絡み合っています。それゆえ、医療、福祉、教育、労働等の機関連携、乳幼児期から卒業後までの一貫性を持った相談と支援が必要です。

<p>相談（家族支援）</p> <p>環境調整 （教師からの 位置づける 集団の中の個</p> <p>手・助け上手 から・助けられ上 自己理解（5年生</p> <p>自らの環境調整（社会 に向けて・失敗）</p>	<p>①小学校就学前</p> <p>現 状 a. 先生や保護者は、子どもの様子が他の子どもと違うと感じている</p> <p>必要な支援 a. 乳幼児の発達に関する相談体制の充実</p> <p>b. <u>家族を支える継続的な療育相談支援</u></p> <p>c. 本人も保護者も大きな不安を抱える小学校就学時における適切な移行支援</p> <p>②小学校</p> <p>現 状 a. 学習、行動、人間関係等の課題が顕在化している</p> <p>必要な支援 a. 校内委員会の設置、ケース会議の実施</p> <p>b. 予防的対応（教育相談、円滑に新学期をスタートさせるためのクラス作り、授業に集中できるような教室の環境整備、指示の仕方や板書の工夫等）を学校全体の教育活動に位置づける</p> <p>c. 家族を支える継続的な相談支援（外部機関との連携）</p> <p>d. 少人数指導、習熟度別指導、自由進度学習、TT、個別指導など個の学習スタイルに応じた多様な指導方法の研究と実践</p> <p>e. <u>ソーシャルスキルトレーニングの研究と実践</u></p> <p>f. <u>学び方を学ぶ（個別最適化学習）</u></p> <p>③中学校</p> <p>現 状 a. 子どもの育ちによって、学習、行動、人間関係等の課題が潜在化してしまい、登校しぶりや不登校等への移行が想定される</p> <p>必要な支援 a. 校内委員会の設置、ケース会議の実施</p> <p>b. 本人との個別面談（自己理解、困り感の認識）、進路面談</p> <p>c. 家族を支える継続的な相談支援（外部機関との連携）</p> <p>d. 少人数指導、習熟度別指導、自由進度学習、TT、個別指導など個の学習スタイルに応じた多様な指導方法の研究と実践</p> <p>e. <u>アサーション・トレーニングの研究と実践</u></p> <p>f. <u>ピアサポート体制（障害に関する正確な知識と対応の理解）、自己理解と説明（トリセツ）、援助要請行動</u></p> <p>④高等学校、その後の社会生活</p> <p>現 状 a. 中学校卒業後の進路選択肢は極めて少ない</p> <p>b. 高等学校退学、ひきこもりなどへの移行が想定される</p> <p>必要な支援 a. <u>就労支援、自立生活支援の必要性</u></p> <p>b. <u>本人を支える継続的な相談支援（サポートネットワーク作り）</u></p>
--	---

[表1] 自力では解決することが困難な課題をもつ子どもに対する教育の現状と必要な支援

(2) そこから見えてきたこと[表1]

どのような一貫性なのでしょう？ また、何を引き継ぐのでしょうか？ そして、ライフステージでは何を目標としたらよいのでしょうか？

相談：「困り感」をもつ子どもと保護者に寄り添った相談をする。（家族支援）

集団：教師からの学級全体への環境調整を通して、集団の中の個を位置づける。

自己理解：自分は何が得意で、何が苦手なのか。難しいことはどうやって解決するのか。どのような認知特性があって、どのような学習方法が合っ

ているのか。もし、耐えられない状況になったら、どうやってクールダウンしてくるのか等、自己を知り、年齢相応の解決方法を徐々に身につける。

自らの環境調整：さらに、適切な自己理解を促進し、自分のことを説明したり、援助要請をしたりして、自らの環境調整を試みる。将来の共生社会実現に向けて、学校ではピアサポートを実践する（生徒と教職員は障害に関する正確な知識と正確な対応を理解する）。進路と自立を関連づけながら課題をフィードバックする。

**3 本当の意味で多様性に対応できる学校への構造改革（通常の教育と特別支援教育の教育課程の一体改革と TT 配置）**

(1) 学習指導要領はコンテンツからコンピテンシーへ

[表2]は、通常の教育と特別支援教育の教育課程の一体化を可能とするカリキュラムの構造化の基本的考え方を示しています。

① 基礎学習

例えば、一学年2クラスで80名の児童がいます。学年で算数の授業を行います。60名のグループには1人の教員が配置され、一人ひとりの児童はタブレットやプリントを活用し個々の進度に応じて学習を進めています。隣の教室のグループは5名で、1人の教員が一斉指導をしています。もう一つの教室では、15名の児童に2人の教員がTT(チーム・ティーチング)で一斉指導をしています。もちろん、国語、社会、理科のそれぞれで、異なる学習集団で学習が進められています。つまり、基礎学習は学習の方法と集団サイズが重要になります。

② 伸展学習

教科の特性に応じて、子どもたちの興味・関心・得意を広げ、伸ばしていくことになります。また、多人数の学習集団を TT の活用で展開していきます。従って、伸展学習は内容と興味関心が重要になります。

③ 活用学習

合科・統合により、課題解決を主とした単元を設定し、異年齢の小集団で学習を進めます。休み時間、給食の時間、掃除の時間等にも学習場面を個の教育ニーズに応じて設定します。課題の例は、「地域の防災マップをつくる」「商店街活性化プロジェクト」「地域貢献活動」などが考えられます。これらの学習は、リーダーシップ力、コミュニケーション力、グループによる課題解決力等を育てたり、ソーシャルスキルトレーニングの場になったりします。つまり、活用学習は異年齢集団と個々人の関与のプロセスを観察することが重要になります。

	基礎学習	伸展学習		活用学習
教科	国語・算数・社会・理科・生活	外国語 プログラミング教育	音楽 図工 体育	家庭・総合的な学習の時間・特別な教科 道徳・特別活動・(社会・理科)
異学年	学年	学年	低・中・高	低・高
学習集団	○少人数～多人数 ○一部個別進度学習	○少人数～多人数 ○興味・関心・得意		○異年齢の小集団 ○課題解決/単元学習 「地域の防災マップ」 「商店街活性化プロジェクト」「地域貢献活動」
ねらい	○認知スタイル ○一人ひとりの学び方 ○言語活動	○得意な表出(表現)手段		○能力育成 (リーダーシップ/コミュニケーション/プロジェクト法/課題解決/グループワーク等)
○教員の複数(TT)配置を基本とする				

[表2] 通常の教育と特別支援教育の教育課程の一体化を可能とするカリキュラムの構造化の基本的考え方

ここでは、個々に応じた基礎学習と活用能力の習得が重要になってきます。個々に応じた基礎学習は、自宅や基礎学習クラスでPCやタブレットを使って、個人の進捗で学ぶことが効果的です。また、活用能力については、多様な集団と場を活用し、課題解決に取り組ませていくことが大切です。基礎学習の場と活用能力を養う場を明確に分けることが必要です。教師は常に指導をするのではなく、活用では観察と評価を主とし、何が足りないのか、何につまずいているのか、メタ認知能力は育っているのかを把握することが求められます。

## (2) 自分の学び方の発見と自己理解の促進

①個々に応じた基礎学習を通して、子どもたちは自分の認知特性に合った学び方を発見していきます。教師は一人ひとりの認知特性をアセスメント（同時処理、継次処理、プランニング、注意、ワーキングメモリー等）し、効果的な学び方に気づくことができるようにしていきます。全員が同じように漢字を100回書いて覚えるようなことは望ましくありません。また、自分の思考の特性も知ることで、演繹的に考えるのか、帰納的に考えるのか、思考マップを効果的に活用できるのか等、自分の効果的な学び方、友達の学び方を知ることが大切です。

②子どもたちは学び方だけではなく、自分のコミュニケーションや社会性の特性を知り、人との付き合い方、グループワークへの参加の仕方等を学ぶ必要があります。この自己理解が他者理解につながり、「助け上手、助けられ上手」になります。自分は何が得意で、何が苦手なのか、難しいことはどうやって解決するのか、どのように人に助けを求め、どのように共存していくのかなど、自己を知り、年齢相応の解決方法を徐々に身につけていきます。

## 4 これからの効率的、効果的な特別支援学級と通級指導のあり方

小学校と中学校は子どもの発達と対応が明らかに違います。しかし、小中一貫して求められることは、「自分の学び方」の獲得と「自己理解」の促進です。一人ひとりの子どもたちは、視覚と聴覚の使い方に得意と苦手をもっています。漢字の学習で、10回ずつ書き取りをすれば、全員が覚えられるとは限りません。へんにつくりで覚える子、漢字の成り立ちと意味で覚える子、空書きで覚える子、唱えて覚える子、それらの組み合わせで覚える子どもなど様々です。「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「板書を写すこと」「話すこと」等の得意不得意を、タブレット等のICT活用で「自分の学び方」を獲得させ、「自己理解」を進めていくことが重要です。

(1) 特別支援学級では、「指導方法別のクラス編成」が最適で効率的

障害がある故、幅広い実態の子どもたちと一緒に教育することの難しさを否定することはできません。「知的障害を伴う児童生徒は、ゆっくり、丁寧に、スモールステップで教科領域を併せた生活に則した内容をクラスの友達と一斉指導で」学ぶことが適しています。一方で、「知的障害のないLD、ADHD、情緒障害の児童生徒は、特化した興味・関心に沿いながら、時間と量と場の構造化して（例えば、15分モジュールで問題量も減らして）」学ぶことが適しています。

(2) 小学校の通級指導では、「ペアによる学習の深化」と「グループによるソーシャルスキルトレーニング」が目標

獲得した「自分の学び方」でのペア学習において、さらなる学習の深化とコミュニケーション能力の開発が将来の職業生活にとって必要不可欠です。そして、同時進行で小グループによるソーシャルスキルトレーニングを進めることが効果的であ

り、小学校には通級の全校設置で効果が期待されます。また、通級指導担当は全クラスの「配慮を要する児童」の支援が可能となります。校内の巡回を通して、児童と少し顔を合わせることで、児童は安心することができます。

(3) 中学校の通級指導では、「面談と自己理解」と「学校として取り組むピアサポート」が目標

中学校では「困り感」や「問題行動」が潜在化し、不登校や引きこもりに移行することが心配されます。そのため、さらなる「自己理解」と「自己開示」が必要となります。自分の得意と苦手を理解し、それを他人に伝え、「助けられ上手」になることが社会適応の上で重要になるでしょう。そのためには、人（担任、通級担当、仲間）との信頼関係を築きながら、自己理解と進路に向けた話し合いの場が必要になります。その上、インクルーシブ社会の基礎である「助け上手」と「助けられ上手」になるために、そして、自分自身で環境調整をするために、学校全体としてピアサポートに取り組むことは将来にとって有益です。将来に向けて、先生だけでなく、仲間を援助資源とすることが重要です。今後も、教職員と共に、全校生徒が障害に関する正確な知識を学習し、正しい対応、アサーティブなコミュニケーションスキルを学習すること

が必要不可欠であると言えます。

## 5 各学校での包括的な取組の必要性

今まで、提案させていただいたことを学校教育全体の場面に包括的に整理したのが〔図1〕です。すべてのことは複雑に関連しているので、現在のような多様性を認め合う社会では包括的な実践が必要で、効果的、効率的であることは言うまでもないことでしょう。授業改善だけでは解決しません。全ての場面で論理的で具体的な方法で、包括的に、全校児童生徒を対象として取り組むことが求められています。これが通常の教育と特別支援教育の一体化です。

本原稿は、

- 1) 「インクルーシブ教育システムとしての通級指導のあり方と今後の展望」p86-87 リーダーズライブラリ4 ぎょうせい 2018年
- 2) 「インクルーシブ教育が目指すもの」p46-49 新教育課程ライブラリII ぎょうせい 2017年の論文を修正加筆し、まとめたものである。

# 各学校での包括的な取組の必要性

## 一貫性

ライフステージ<幼・小・中・高・大>

- <幼> 家族支援
- <小> SST 学び方を学ぶ 自己理解
- <中> 自己理解のための個別面談 自己説明（トリセツ）支援要請
- <高> 進路 自立生活 就労支援

## 個人の発達

- <認知特性> 視覚（同時処理）聴覚（継次処理）
- <授業改善> UDL自由進度、時間と質と場の構造化  
TT多層支援システム
- <個別最適な学びと協働的な学び>
- <学習者エンジェンシー>

## 多様性の共生

- <ピアサポート>
- <アサーション>
- <社会性と情動の学習：SEL>
- <ポジティブな行動介入と行動支援：PBIS>

〔図1〕 各学校での包括的な取組の必要性

## 編 集 の 趣 旨

ここからのページでは「相模原市の取組～子どもたちにつながる支援・取組の視点から～」と題し、大野南中学校分校、支援教育課、教育相談課、教育センターの取組について紹介します。

学校現場では、子どもたちの学びと成長のために、日々、様々な形で支援が行われています。形式的な支援ではなく、多様な教育的ニーズに応じて、どのような支援ができるのか、どのように寄り添えばいいのか、数多くの課題があります。そこで、大野南中学校分校、支援教育課、教育相談課、教育センターの取組を知っていただき、子どもたちにつながる支援について考えることで、新たな視点を獲得のきっかけにいただければ幸いです。

大野南中学校 分校	共に学び、共に生きる ～夜間学級が紡ぐ「学習と支援」～
支援教育課	多様な教育的ニーズに応じた支援
教育相談課	ポジティブ行動支援について
教育センター	不登校児童生徒の学習指導・支援について

## 共に学び、共に生きる ～夜間学級が紡ぐ「学習と支援」～

### 1 はじめに もう一度、学びの門を叩いた生徒と共に

令和4年に開校した本校は、5年目の春を迎えようとしています。ここには、かつて不登校を経験した方や、外国籍で義務教育の機会を十分に得られなかった方々が、「もう一度学びたい」という願いを胸に通っています。

現在、教室で机を並べているのは10代から40代までの21名。6カ国にわたる多様なルーツをもつ生徒たちが、互いの違いを認め合いながら共に学んでいます。私たち教職員の使命は、生徒が自分の役割を果たし、自分らしい生き方を実現できるよう、その土台となる教育活動を提供することです。多様な教育的ニーズを包み込む「インクルーシブな学びの場」として、「各教科等の学習」と「支援教育」の両輪を大切にしながら、教育活動を推進しています。

### 2 教育活動の柱 夢と目標を全力で応援するために

#### (1) 各教科等の学習

「わかる」喜びを分かち合う学習の工夫

本校では中学校の教育課程を約7割に凝縮していますが、教育課程の基本は全日制の学校と変わりません。資質・能力ベースの授業をめざし、教育センターが発信している「スタートとゴールを意識した授業づくり」を実践しています。生徒の多様なニーズに応えるため、チーム・ティーチングを軸に、観察・実験、ロールプレイング、プレゼンテーションといった体験的な活動を重視するとともに、対話的な学びを大切にしています。また、教科

の垣根を超えて全職員で授業づくりを検討し、全ての生徒が目標を達成できるよう工夫を凝らしています。特に外国籍の生徒に対しては、資料へのルビ振りや「やさしい日本語」の使用、母語による翻訳支援、日本語学習の教室外での個別指導など、言葉の壁を越えるための支援を行っています。また、必要に応じて小学校の学習内容に立ち返るなど、柔軟な指導を行っています。



#### (2) 支援教育

生徒を主語にした重層的な支援

私たちのミッションは、生徒の課題に誠実に向き合い、「できない」を「できる」へと変えていくことです。そのため、職員室では常に「生徒を主語」にして、一人ひとりの微細な変化や課題を語り合うことを大切にしています。この「誰一人取り残さない」姿勢を具体的な仕組みとしたものが、夜間学級における「多層支援モデル」の実践です。

#### 【1次支援：集団全体への支援】

全ての生徒が安心できる居場所をつくるための、集団全体への働きかけです。学びのユニバーサルデザインの視点を取り入れ、視覚的な情報の整理や多様な提示方法など、「学びの障壁」を取り除く環境を整えることで、クラス全体の「わかる・できる」を底上げしています。

### 【2次支援:個に応じた支援】

1次支援では届きにくい特定の課題に対し、始業前の時間や「ゆとりの時間(個人の課題に取り組む時間)」を活用して、日本語学習や学び直しなどの個別学習を行っています。病状の悪化などで欠席が多くなった生徒に対しても、「出席していないから評価できない」で終わらせず、指導の機会を設けて学習支援をします。

### 【3次支援:関係機関とのチーム支援】

貧困、DV、在留資格、精神障害など、学校だけでは解決が困難な背景をもつ生徒に対しては、専門機関と密に連携しています。毎週、SC やSSW を交えた支援検討会議を実施し、多角的な視点から指導方針を決定しています。また、貧困の課題に対しては、NPO (ME-net) と連携した食料支援を行うなど、生活基盤から支える体制を整えています。

こうした多層的な支援の土台となるのが、学年の枠を超えた支援チームの取組や、心の隙間に寄り添う随時の「チャンス相談」です。全教職員で全生徒を見守り、誰一人取り残さない支援の輪を広げています。



### 3 これまでの歩みを振り返って 教師もまた、生徒に生かされて

開校からの4年間、私たちは生徒の多様なニーズに対し、何が最適解なのかを模索し続けてきました。また、学習と支援の両輪を回すために、授業研究や、在留資格、ICT の利活用、日本語指導など多岐にわたる研修を重ねてきました。特に Gemini をはじめとする Google Workspace の積極的な活用は、生徒の学びを深めるだけでなく、

対面での支援に注力するための貴重な時間を創出しています。

こうした歩みの中で、確かな成果も見えてきました。かつて不登校を経験した生徒が、今では毎日休まず登校できるようになっています。また、生徒一人ひとりが自らの成長を実感しながら自分らしい生き方を模索し、笑顔で卒業しています。そして大きな変化は、私たち教師自身の中にもありました。多様な特性や困難を抱える生徒たちと向き合う中で、教育に対する見方・考え方が大きく変わり、「生徒を主語にして取り組む」という教育活動の原点に改めて気付かされたのです。



### 4 今後の展望

学習と支援の両輪が、自立の礎に  
全ての活動を「キャリア教育」として

外国にルーツをもつ生徒や、不登校を経験して中学校を卒業した生徒の増加が予測される中、夜間学級が果たすべき役割は、これまで以上に重みを増しています。私たちは、「誰一人取り残さない」という信念のもと、「もう一度学びたい」と一歩を踏み出した方々の夢や目標を、全力で応援したいと考えています。そのためには、一人ひとりの教育的ニーズに応じた柔軟な指導・支援と、仲間と高め合う協働的な学びをさらに深化させていく必要があります。

夜間学級での日々の関わりは、その全てが生徒の自立につながる「キャリア教育」そのものです。これからも、めざす生徒像を胸に、生徒が自らの役割を果たし、自分らしさを大切にしながら生きていけるよう、全教職員で伴走していきます。

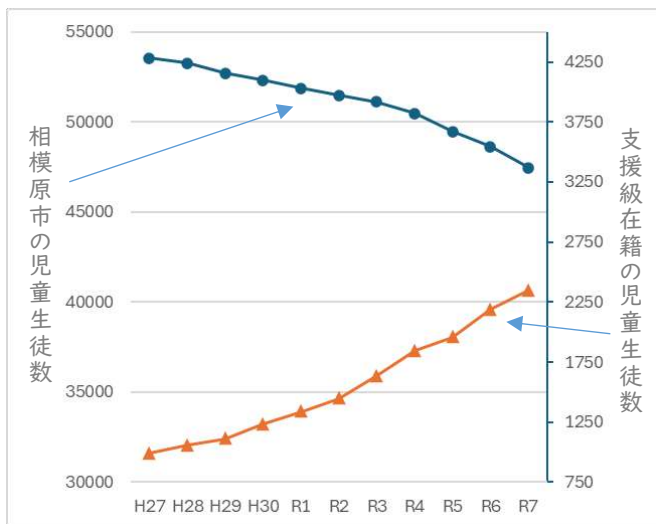


# 多様な教育的ニーズに応じた支援

## 支援教育課の新設

### 1 支援教育課新設の目的

昨今、支援を必要とする児童生徒数は、全国的に増加しています。相模原市においても、下記の〔グラフ1〕に示したとおり、市内の児童生徒数(●)は、減少しているものの、特別支援学級に在籍している児童生徒数(▲)は、平成27年度991人から令和7年度2,346人と約2.4倍へと急増しています。



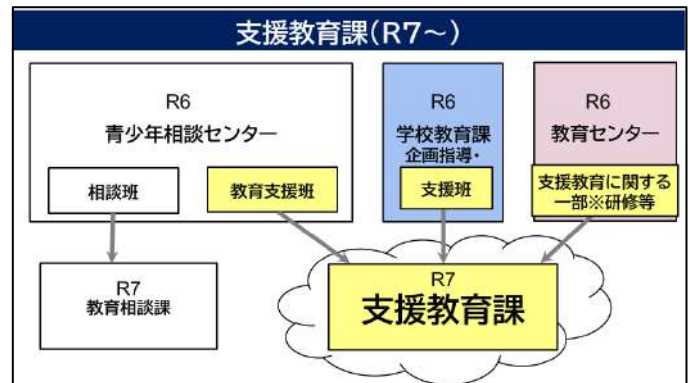
〔グラフ1〕相模原市における児童生徒数の推移

また、文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」(令和4年12月)では、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒数の割合は8.8%とされています。

さらに、相模原市では通級指導教室(サポートルーム、きこえとことばの教室)で指導を受けている児童生徒数は、令和2年度の456人から令和7年度には583人となり、

こちらも増加を続けています。こうした状況に、学校において、より適切な支援が行われるよう、令和7年4月に支援教育課が新設されました。

支援教育課は、令和6年度まで、青少年相談センター・学校教育課・教育センターが、それぞれ所管していた支援教育に関する業務を総括する機関として新たに位置付けられました。窓口を一元化することにより、学校や保護者の分かりやすさや相談のしやすさが増すとともに、より迅速な判断や対応ができることをめざしています。



### 2 支援教育課の業務について

「相模原市第2次教育振興計画」に基づき、多様性の理解や人権意識の向上、特別支援教育の推進、特別支援教育の体制の充実を進めています。ここでは、支援教育課の主な業務について、6つ紹介いたします。

#### (1) 支援方法等の指導助言

特別支援学級における特別な教育課程の編成や自立活動の取組、通常の学級における多様な教育的ニーズに応じた支援方法等についての指導助言を行います。

#### (2) 人材育成

全ての教員を対象に、教育センターと連携して研修を行い、支援教育に関する知識や理

解の充実を進めています。また、相模原市特別支援教育研究会と連携し、「特別支援学級・通級指導教室経営ガイドブック すまいる365」を作成し、教員が広く活用できるように周知や研修を行っています。

### (3) 人的支援と巡回相談

非常勤介助員や支援教育支援員、学校看護師、学校生活支援員（学校サポーター）を、児童生徒の教育的ニーズに応じて配置しています。

また、支援教育指導員による巡回相談を実施し、児童生徒に対する具体的な支援方法や校内支援体制の充実についてのコンサルテーションを行っています。

### (4) 学びの場の整備

教室の基礎的環境整備の在り方について、助言を行い、階段昇降車やワイヤレス補聴援助システムの貸し出し、音声教材や拡大教科書の紹介等を行っています。

### (5) 就学相談

新就学児や既就学児の就学相談を行い、特別支援学級や通級指導教室等の適切な学びの場の検討・判断を関係機関と連携しながら進めています。

### (6) 関係機関との連携

特別支援学校のセンター的機能を活用した巡回相談や就学相談では、県立特別支援学校の地域支援の先生方と連携しています。さらに、関係機関相互の連携強化を協議する支援教育ネットワーク協議会や、学校や医師、関係機関の連携を図る医療的ケア運営委員会を開催しています。

## 通級指導教室における支援

前述したとおり、国の調査によると、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の割合は、8.8%とされており、本市においても、通級指導教室に通う児童生

徒数が増加しています。現在、通級による指導は、児童生徒が設置校に通う方法で運営されていますが、保護者の送迎が必要なことや、往復の移動時間がかかる等の課題があります。そうした理由により、通級による指導が見送られるケースもあることから、令和8年度より通級指導教室を増設し、近隣の学校で指導が受けられるよう環境を整えています。

また、通級指導教室の担当教員が児童の在籍校へ出向いて指導を行う「拠点巡回方式」を、小学校2校で試行することとしました。児童は在籍校にしながら、通級担当教員の巡回により指導が受けられるようになります。

通級拠点巡回方式のイメージ図



加えて、通級指導教室の一年間の流れや具体的な指導例などを「すまいる365」に増補することで、指導の充実をめざしています。

## 支援教育のこれから

特別支援学級や通級指導教室に加え、通常の学級においても、支援が必要な児童生徒数が増加しています。

そうした子どもたちの多様性を包摂し、多面的で多角的なアプローチを進めることが、子どもたちの可能性を最大限に伸長することにつながります。


支援教育課では、引き続き、誰一人取り残さない温かさのある教育の実現をめざし、学校・先生方とともに、より良い支援に取り組んでまいります。

# ポジティブ行動支援について

## 1 教育相談課の紹介

教育相談課は令和7年度より、これまでの青少年相談センターを再編し、主に「青少年相談に関すること」「教育相談に関すること」「長期欠席児童生徒に関すること」といった支援事業を行っています。そして、これまでの相談班に加え、新たに、不登校支援企画班をつくり、「さがそうみらい みんなでつながる アクションプラン」の作成など、不登校に特化した施策立案もを行っています。

さがそうみらい  
みんなでつながる アクションプラン  
～相模原市不登校総合対策実行計画～



相模原市  
相模原市教育委員会

**基本方針 1** 全ての児童生徒が安心して過ごせる、魅力ある温かい学校づくりの推進

国においては、教育機会確保法を定め、同法を踏まえたCOCOLOプランなどにより、全ての児童生徒が豊かな学校生活を送り、安心して教育を受けられるよう、児童生徒と教職員との信頼関係や児童生徒相互の良好な人間関係の構築等を通じて、学校が安心感、充実感を得られる活動の場となることを目指しています。

本市においては、魅力ある温かい学校・学級づくりのために、肯定的・教育的・予防的な方法で児童生徒への支援をしています。

全ての児童生徒が「自分という存在が大事にされている」、「学校・学級が心の拠り所になっている」学校が自分にとって大切な意味のある場となっている」と実感できる環境を構築するとともに、きめ細かな学習支援を提供し、誰一人取り残さない学びを保障する取組を推進します。

**施策の方向と主な取組**

1 全ての児童生徒にとって、学校や学級を魅力ある温かい場所にします

児童生徒の望ましい行動が増えるような働きかけを行いながら、学校生活をサポートする人材の配置や、教職員の資質向上に向けた研修を充実させ、全ての児童生徒が安全に、安心して、意欲的に学べる学校・学級づくりを推進します。

**主な取組**

- ・**ポジティブ行動支援の推進**  
児童生徒がよりよい生き方を見つけながら社会的自立へと進めるよう、肯定的、教育的、予防的な「ポジティブ行動支援」の考え方による支援を推進します。
- ・**学校生活支援指導（学校カウチャー）の配置**  
通常の学級において、支援を必要とする児童の確保面及び生活面をサポートする人材を配置します。
- ・**教職員の資質向上に向けた研修の充実**  
教職員に向けた「だれもが行きたくなくなる学校づくり研修」や「だれもがわかる授業づくり研修」などを開催し、教職員の資質向上を図ります。

アクションプランにもあるように、教育相談課では、児童生徒がよりよい生き方を見つけながら社会的自立へと進めるよう、「ポジティブ行動支援」の考え方による支援を推進しています。

## 2 ポジティブ行動支援について


ポジティブ行動支援(Positive Behavior Support:PBS)は、罰的ではない肯定的、教育的、予防的な方法で支援するための枠組です。多層支援モデルでもあり、学級・学校規模など全員を対象とした支援から個別の支援まで、ニーズや状況に応じた幅広い支援が行われます。

**ポジティブ行動支援とは?**  
Positive Behavior Support (PBS)

ポジティブ行動支援においては、**行動の理由を明らかにして**、その理由に基づいた**支援計画を立てる**ことが目指される。その過程におけるアセスメントや適用される様々な技法は**応用行動分析学**に基づく。  
(日本ポジティブ行動支援ネットワークHPより)


**ポジティブ行動支援 (PBS) では**

望ましくない行動



望ましい行動


望ましい行動



望ましい行動

望ましい行動(良い行動)を学習することで、相対的に望ましくない行動(困った行動)が少なくなる、と考えます。

**多層支援モデルとしての ポジティブ行動支援**



(児童生徒を階層で区別するような考え方はありません)

- 【第1層支援】** 学校・学級規模 全員を対象としたユニバーサル支援
- 【第2層支援】** 個別の必要が一部の児童生徒
- 【第3層支援】** 特別な支援を必要とする個人

その始まりは、1990年代の米国からで、すでに2万7000校以上で取り上げられています。実践している学校とそうでない学校とで、いじめの発生率や不登校数も違うというデータが出ており、科学的に効果が検証されているものと言われています。日本においても徳島県では、全県で取り組んでいます。(参考:教育新聞、日本ポジティブ行動支援ネットワーク)

現在、相模原市においてもポジティブ行動支援が広がってきています。日本ポジティブ行動支援ネットワーク運営委員で、本市不登校対策検討委員会の副会長でもある東京学芸大学の松山康成先生に、令和6年度から研修で講師を務めていただいております。今年度は、市内小中学校等の全管理職、全支援の担当の教員に対して研修を行っていただきました。そのことにより、ポジティブ行動支援の概念は全市的に広がり、支援の具体的な実践も見られるようになってきています。

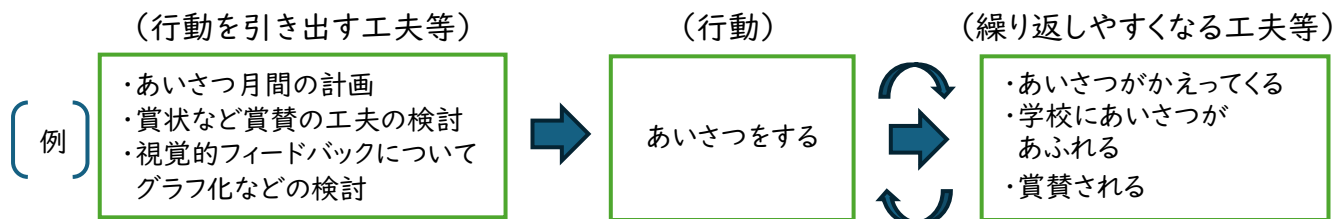
【第1層支援(集団を対象としたユニバーサルな支援)】の実践例

学校の生活目標を生かした取組

データの活用  
視覚的フィードバック

子どもの意欲を向上させる視覚的支援

承認・賞賛により  
望ましい行動が増えます



3 相模原市の先生方へ

今後も先生方や子どもたちの「こうしたい」「こうなりたい」ということの実現に向けて、肯定的、教育的、予防的なポジティブ行動支援の実践が充実していくことを願っています。研修やコンサルテーション等、学校と教育委員会が連携しながら取り組んでいきたいと思ひます。

## 不登校児童生徒の学習指導・支援について

相模原市では、誰一人取り残さない温かさのある教育を基本とした不登校対策を推進しています。このページでは、学校における、不登校児童生徒への温かさのある支援につながるよう作成した、『不登校児童生徒への支援の手引き』（令和7年3月相模原市教育委員会）について紹介します。

### 1 相模原市の現状とこれまでの取組

近年、不登校児童生徒数は年々増え続けており、令和6年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」において、全国で353,970人（小学校137,704人、中学校216,266人）、相模原市においては、2,084人（小学校で799人、中学校で1,285人）となっています。

本市では、不登校対策として、令和8年1月に『さがそうみらい みんなでつながるアクションプラン～相模原市不登校総合対策実行計画～』[図1]を発表しました。

令和元年度から「不登校対策検討委員会」や「不登校対策プロジェクト会議」などを立ち上げ、学識経験者や地域団体の代表者等を交えながら、本市の不登校の現状分析や支援策の検討などを行ってきました。

その取組の一つとして、それまで学校を支援するために作成していた様々なガイドラインを一元化し、『不登校児童生徒への支援の手引き』として取りまとめました。（『さがそうみらい みんなでつながるアクションプラン～相模原市不登校総合対策実行計画～』より抜粋）

この『不登校児童生徒への支援の手引き』



[図1]

は、第1分冊と第2分冊に分かれており、

- ・相模原市の不登校対策の方針
- ・学習指導・支援について
- ・不登校対策・対応のポイント

などについてまとめています。

### 2 不登校児童生徒の学習指導・支援

『さがそうみらい みんなでつながるアクションプラン～相模原市不登校総合対策実行計画～』内附属資料に示されている意見聴取（不登校状態となっている児童生徒や「学校に行きたくない」と思ったことがある子ども、校内・校外教育支援センターに通っている児童生徒78人を対象）には、「学校や教室に通えずに悩んでいる時に、周りにどのようなサポートがあると良いか。（複数回答可）」という質問に対し、

学校以外で学習したり 過ごしたりできる場所	45人
学習がわかりづらいときの サポート	32人
自分一人でも学習に取り組み るようなドリルやアプリ	31人

という回答が示されています。これは複数ある選択肢の中でも高い反応を示したものであり、学習指導・支援についてのニーズが大きいことが分かります。

『不登校児童生徒への支援の手引き』【第1分冊】[図2]では、学習指導・支援について、先生方が具体的な支援につなげることができるよう不登校児童生徒への学習指導・支援のイメージなどについて、教科や、さまざまな場面を想定してまとめています。



[図2]

### 3 チームで取り組む

不登校児童生徒の状況は様々であり、1人1台端末によるICT活用や教室や学校外での支援など、多様な学びの場を整備、充実させることは、学習について不安を感じている児童生徒にとって大きな支援となります。そのため、校内においては養護教諭、スクールカウンセラーなど児童生徒にかかわる教職員と協力し、「チーム学校」として取り組むことが大切です。また、保護者、教育支援センター等の公的機関や民間団体等の職員と連携を図ることも大切です。



さらに、教職員が同じ方向で児童生徒の支援について考える際の資料として『不登校児童生徒への支援の手引き』をご活用いただきたいと考えています。具体的には、

- ・不登校対策における基本理念の共通認識を図るための資料として活用する。
- ・学習指導・支援と評価を行う際の支援の手立てを具体的に考えていくための資料として活用する。

というようにして、先生方の児童生徒への温かな支援の一助となれば幸いです。



# 相模原の研究

## ～本市教育における課題を踏まえた研究実践について～

### 編 集 の 趣 旨

ここからのページでは「相模原の研究～本市教育における課題を踏まえた研究実践～」と題し、研究推進事業や教育研究員研究の取組について紹介します。

「研究推進事業」では、本市教育における課題を踏まえ、自校の強みや課題、子どもの実態などを分析することを通して、学校が自ら研究の目的を定めるとともに、課題解決のための具体的な方法について先生方が主体的に考え、授業実践等に生かしています。その成果を市全体へ周知することで、本市教育の一層の充実及び本市の教育目標の具現化をめざしています。

また、「教育研究員研究」については、本市における教育の質の充実・向上を図るために小学校、中学校、義務教育学校の教員が「教育研究員」として、学校や地域社会における教育課題について研究を行うものです。令和6年度から2年間進めてきた『『主権者に求められる力』の育成に関する研究』をテーマとした取組について紹介します。

学校では、多様な個性や特性を有する子どもが在籍している実態があり、学校で研究を行う過程には、さまざまな支援の視点が含まれています。研究の取組について考えるとともに、「支援教育」という視点から研究を捉えなおすことで、先生方が「多様な教育的ニーズに応じた支援や指導のあり方」について考えるきっかけとしていただければ幸いです。

## 学校名・研究テーマ

<b>支援教育</b> 最終年度/2年研究	旭中学校 全ての生徒が自分の居場所で学び、自他を思いやりながら、自分らしく自己実現を図る学校づくり
<b>算数</b> 最終年度/2年研究	桜台小学校 よりよい学び手として育つ子ども～資質・能力ベースで考える～
<b>体育</b> 最終年度/2年研究	橋本小学校 課題を見付け、その解決に向けて思考し、動きが高まる子どもの育成～主体的・対話的で深い学びを通して、資質・能力を身に付ける授業づくり～
<b>キャリア教育</b> 2年目/3年研究	田名中学校区（田名中学校、田名小学校、田名北小学校） 「自ら考え行動することができる児童生徒」、「人の気持ちを理解し、助け合うことのできる児童生徒」を育む教育活動の展開
<b>外国語</b> 1年目/2年研究	相模台小学校 「相手のことを知りたい、相手に伝えたい」と思える授業づくり～読んだり書いたりする活動を通して～
<b>音楽</b> 1年目/2年研究	鶴園小学校 なりたい自分になるために つながる力を高める子 ～たのしんで表現する活動を通して～
<b>各教科</b> 1年目/2年研究	相模丘中学校 生徒の学習意欲を高め、アウトプット力の向上を導く授業づくり～指導と評価の一体化をめざし、単元を見通した授業実践の取組～
<b>教育研究員 研究</b>	主権者として求められる力の育成に関する研究

# 支援教育の推進に関する研究 旭中学校

全ての生徒が自分の居場所で学び、自他を思いやりながら、  
自分らしく自己実現を図る学校づくり

## 1 研究主題について

支援を必要とする児童生徒が増加する中、学校こそが全ての生徒が心地よさを感じながら安心して学び、自己肯定感を育み、自らの人生を切り拓く力を培っていく場所であるべき筆頭であることを、教員一人ひとりが再認識することが求められています。

生徒が多くの時間を過ごす授業、生徒同士の文化を創出する生徒会活動、生徒の発達を支持する生徒指導、一人ひとりを支える生徒支援の4つの視点を柱に、生徒の多様性を受け入れ、生かす教育活動の在り方を研究することで、全ての生徒が地域の学校で学び、自己肯定感を高め、自己実現を果たしていけると考えます。また、学校に求められる「もの」「こと」「ひと」等を教育委員会とともに多角的に追求し、真に求められる教育施策を導き出し、誰一人取り残さない教育の実現を図る提言とするため、この主題を設定しました。

## 2 研究内容

4つの視点を柱とした学校運営の推進

- 校内研究：分かった、できた、知りたい、参加している、を実感する授業づくり
- 生徒会活動：一人ひとりが主体的に行動する生徒会活動、小中一貫教育の推進、自己肯定感の向上、生徒会スローガン「My home」の実践  
学級活動：全ての生徒が所属感を実感できる学級経営
- 生徒指導：多様な生徒の理解と発達支持的生徒指導の推進
- 生徒支援：不登校等など学校生活に困難を抱える生徒の支援

## 3 研究方法

令和7年度は、令和6年度の取組をより深化させることをめざし、教員一人ひとりが支援教育に関する知識・技能を習得し、学びを実践するための手立てを考え実践し、教育活動の中で生きて働くものとしていく支援教育（学校経営）を推進しました。今年度は、

- ・支援教育ネットワーク協議会安藤正紀氏の助言のもと、「ASAHI サポ(ピアサポート)」体制の構築 \*図1
- ・生徒が個々の教育ニーズに応じた課題を設定し、知識・技能を習得する授業づくり

の2点を推進の重点としました。



[図1] 「ASAHI サポ」のイメージ図

## 4 本研究における実践

「ASAHI サポ」とは、①自己理解を深めた上で、②他者理解：相手のことを理解しようとする、③ピアサポート：仲間の支え方を理解し実践することができ、④問題解決：互いの生きづらさを相互支援で解決し、仲間も自分も成長することができる、という「ともに認め合い、ともに支え合う」考え方です。

## 「ASAHI サポ」 校内での取組

### ①安藤先生を講師に迎え、研修を実施

「ASAHI サポ」の実践を深めるため、発達障害の理解を深める研修により、人により認知処理の特性が異なることを理解した上での授業づくりや、生徒一人ひとりが適切に支援要請を出すことの大切さについて共通理解を図りました。



写真1: 研修会の様子

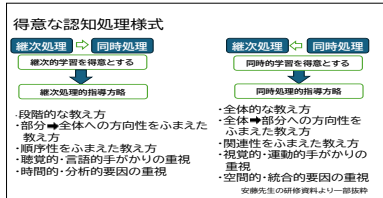


写真4: 全校評議会の様子



写真5: Canvaで意見交流



写真6: ピンクのリボン運動

旭中学校区の小学校と連携し、いじめを許さないという雰囲気を作る活動。いじめ防止に向けて自分が取り組むことを書き自分事として考える機会となっています。

### ②安藤先生を講師に迎え、多様性の理解を深める全校道徳や縦割り道徳を実施

10月には全校道徳で「多様性の理解」をテーマに、発達障害を抱える大学生のエピソードからピアサポートを知り、「私のトリセツ」をもとに、友だちとの関わりを考えました。

11月中旬に実施した縦割り道徳では「上手な人との関わり方」をテーマに、演劇部による動画を視聴し、異学年で交流しながら「苦手な人との関わり方」について考え、どうすればよいか理解を深めました。

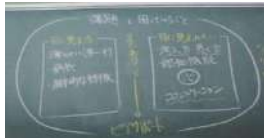


写真2: なぜピアサポート？

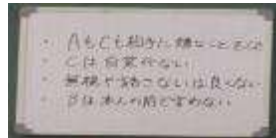


写真3: グループの協議内容

また、11月下旬には「多様性への理解とピアサポート」をテーマに、NHKの「バリバラ」という番組をもとに、ピアサポートや共生社会、インクルーシブ教育について、それぞれが考え、自分には何ができるか、協議を通して考えを深めました。

### ③生徒会活動の取組～全校評議会の様子～

生徒会本部による全校評議会では、新たなスローガン「My home ～ALL IN with HEART～」をもとに、「誰もが生きやすい環境に」をテーマにリーダーたちが協議し、みんなでよりよい旭中をつくるために何ができるかを考えました。これから学級・学年・学校でどのような広がりを見せるか楽しみです。

### ④自己調整しながら学ぶ～数学の授業～

単元全体の目標・内容・流れを知り、見通しをもった上で、今日の目標を学習カードに入力し、学習に取り組みます。教員がそれぞれの進捗状況をモニターに提示し、全体の学びを可視化し、生徒たちが学習を進めます。



写真7: 数学の自由進度学習の様子

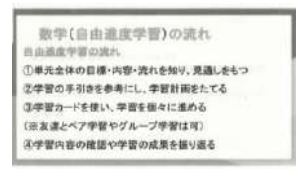


写真8: 流れについて

## 5 2年間の研究から見える展望

本研究では、4つの視点を柱とした学校運営により、「ASAHI サポ」の取組を充実させてきました。そこで、改めて、学校こそが、全ての生徒が自分の居場所で学び、自他を思いやりながら、自分らしく自己実現を図ることができる場であることを感じているところです。今後は、2年間で育んだ土台を生かしながら、「ASAHI サポ」を発展させていければと考えます。

## 6 支援教育の視点

「相手を認め、認めていることを行動に移す、具体的には…」と生徒が自分の言葉で語っていた姿が印象的でした。一人ひとりが自分の個性と仲間の個性を理解し、相互に理解を深め、相互に自己調整することが、多様性の包摂につながります。取組を通して、これからの社会を生きる生徒たちに求められる力が醸成されていることを改めて感じました。

# 学習指導・評価の充実に関する研究 算数 桜台小学校

## よりよい学び手として育つ子ども

### ～資質・能力ベースで考える～

#### 1 研究主題について

桜台小学校では、令和2年度から4年間、「数学的な見方・考え方を働かせる子ども達」をテーマに研究を行いました。その過程で、「学び方」を身に付けることが大切であることを見いだしました。そこで、令和6年度からの研究では「何ができるようになるか」という算数科の目標に示された資質・能力と、「どのように学ぶのか」という学び方の両方を資質・能力と捉え、このテーマとしました。

#### 2 研究内容

仮説：資質・能力ベースで授業をつくることにより、子どもは資質・能力を身に付け、よりよい学び手として育っていく。

桜台小学校では、次のように算数を学ぶ子どもの姿を「よりよい学び手」としました。

- ア 問い：自ら問いを見いだす(深い学び)
- イ 表現：思いや考えを表現する(深い学び)
- ウ 見通し：解決の見通しをもち、粘り強く取り組む(主体的な学び)
- エ 振り返り：自己の学習活動を振り返って次につなげる(主体的な学び)
- オ 対話：対話を通して学びを広げ深める(対話的な学び)

また、次のように授業づくりの視点を明確にしました。

- (1) ゴールから考える授業づくり
- (2) 学びのステージを明確にした授業づくり
- (3) 発問の意図を明確にした授業づくり
- (4) 学び方が分かる授業づくり

1年目の研究では、子どもたちは課題に向かって解決の見通しをもち、友達とともに粘り強く取り組む姿が見られるようになりました。また、自分の考えを表現できるようになり、友達との双方向性のある学びにつながるなど、よりよい学び手として育ってきました。

一方で、教師が学びのステージ(※)に乗せることを意識しすぎるあまり、説明過多となってしまう、子どもがつまずきを自覚したり、表出したりできないまま授業が進むこともありました。そのため、つまずきから、自ら問いを見いだす力を身につけることが課題として挙げられました。

このことから、2年目は、授業づくりの視点に「つまずきを想定した授業づくり」を追加し、子どもがつまずきの価値を実感し、自ら問いを見いだして学びに向かうことができるようにしていくことに重点を置き、研究を推進しています。[図1、図2]

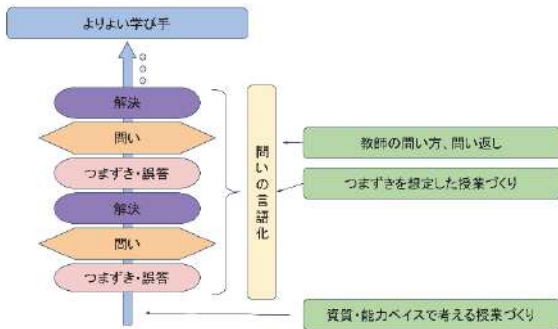
※学びのステージとは「子どもが解決すべき問いを見だし、解決するための見通しをもっている状態」

- (1) ゴールから考える授業づくり
- (2) 学びのステージに  
子どもが自分であがる授業づくり
- (3) 発問の意図を明確にした授業づくり
- (4) 学び方が分かる授業づくり
- (5) つまずきを想定した授業づくり

※R7の重点(校内研究計画書より)



[図1] 授業づくりのイメージのR6からの変容



【図2】授業づくりの具体的なイメージ

### 3 研究方法

#### ① 研究授業を通して日々の実践の成果と課題を共有する。

研究授業を通して、日々の取組の成果を共有するとともに、新たな課題を見いだす。

#### ② 児童の学びに対する意識を把握する。

アンケートを実施（4月、7月、12月、3月）し、算数科への意識を調査するとともに、アンケートの内容から、よりよい学び方を意識できるようにする。

### 4 本研究における実践

#### ○つまずきを想定した授業づくり

桜台小学校では、子どもが「学び方」を身に付けることを大切に授業に取り組んでいます。授業では、「ここまでではできたけれど、ここでわからなくなった。」というように、自分の学びを把握している様子が感じられました。そして教師がそのつまずきを拾い上げ、問い返すことで子どもの学びを促す姿が見られました。つまずくことが当たり前前の教室では安心感が生まれ、子ども同士の対話においても「わからない」「ここが不安」というように、自身のつまずきを表出する姿が見られるようになり、子どもたちの中につまずきは学ぶために大切なもの（学びの価値）であるという実感が生まれてきていると感じました。

#### ○教師の学びにつながる校内研究体制

教材研究においては、「単元における資質・能力」「子どものつまずき」「子どもの学ぶ姿」などの視点から、教材研究を行っています。

授業後の協議では、「子どもの姿はどうだったか」という一貫した軸が存在しており、これからの授業づくりにおける方向性を全員で共有しています。このように、計画-実践-改善のサイクルが確立されていることが、授業力の向上につながっています。



【写真1】指導案検討の様子

### 5 2年間の研究から見える展望

子ども自身が、友だちとの双方向性のある学び方を身に付け、価値のあるものだと実感していることが、「キャリア・パスポート」などに表れていました。一方で、「思いや考えを表現すること」「粘り強く取り組むこと」についての課題が残っています。そこで、教師が単元や領域を通して教えることと引き出すことを理解するとともに、子どもの実態をとらえる見取りの質を高め、どの子ども変化や成長を実感できる授業をめざしていきたいと考えています。

### 6 支援教育の視点

「授業がわからない」「みんなが自分のことをわかってくれない」といった様々な悩みや課題を抱える子どもたちが、自分で学びを進められるために、桜台小学校の「つまずきを大切にする」「『学び方』を学ぶ」ことの研究はとても大切な視点です。子どもの抱える課題の要因は様々です。「つまずき」という視点から子どもの姿を見取り、その要因を捉えようとする事は、様々な課題を抱えた子どもたち一人ひとりのニーズに適切に対応していくことの第一歩になるのではないのでしょうか。他者を認め合える環境の中で、安心して『わからない』って言っているんだ。』『わからない』って大切だね。」と感ずることのできる授業になれば素敵だと思いませんか。

## 学習指導・評価の充実に関する研究 体育 橋本小学校

課題を見付け、その解決に向けて思考し、動きが高まる子どもの育成

～主体的・対話的で深い学びを通して、資質・能力を身に付ける授業づくり～

### 1 研究主題について

本校では昨年度、研究テーマを設定するために推進委員会で話し合った中で、研究テーマが各校独自に設定されていることは、子どもたちの特徴を掴んでいるという利点がある一方で、他校へ異動した際に学んだ成果を生かしづらく、積み重ねてきた理論や実践は汎用性が低いのではないかという意見が挙がりました。また、これまでの3年間の研究では、「教師」を主語として進めてきた色合いが強く、教師の体育科における技術論に進んでいってしまうことも指摘されました。

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説体育編」には、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」と示されています。

以上のことから、①「子ども」を主語にした授業実践へのマインドセットをすること、②昨年度の研究テーマを基に、学習指導要領に沿ったテーマへの変更をすること、③昨年度課題に挙げた系統性を学ぶために領域を絞ること、を大切にし、「課題を見付け、その解決に向けて思考し、動きが高まる子どもの育成～主体的・対話的で深い学びを通して、資質・能力を身に付ける授業づくり～」という研究テーマを設定しました。今まで積み重ねてきた研究を大切にしながら、さらに学習指導要領の内容を意識して、体育科における系統性や授業の改善を図ることにより、他領域・他教科等へと学びを汎用できる子どもの育成につながると考えられます。また、そのことが教師の授業力向上や教育観の変遷にもつながると考えました。

### 2 研究内容

仮説：身に付けさせたいことを明確にし、「主体的・対話的で深い学び」を生み出す授業づくりを図れば、子どもの思考と動きが高まり、運動への関心や意欲を高め、資質・能力を育むことができるだろう。

昨年度は、この仮説を基に、次の視点を意識して、体育を学ぶ子どもたちの育成を考えました。また、研究を進めていくうえで、次のような視点を大切にしました。

【視点①】子どもが自ら課題発見→課題設定するための手立て

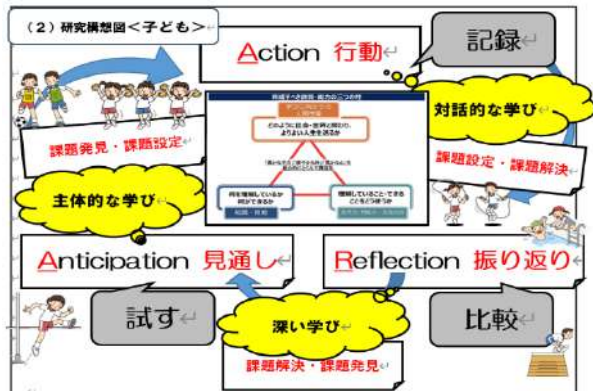
【視点②】子どもが自ら課題設定→課題解決していくための手立て

「子どもの姿で語ろう」

- ・教師の手立てで〇〇さんはどう変わったか。→その手立ては有効だったか。
- ・子どもは主体的に学習に取り組んでいたか。→子どもが発見・設定した課題と学習活動はつながっていたか。

このように子どもの姿を通して、系統性や学びの連続性についても意識しながら、研究を進めてきました。

昨年度の研究授業から見えてきたものは、①現状を知る・試す時間の設定により、課題発見や課題設定につながる事、②記録（映像、記録カード等）を基にした対話によって課題設定や課題解決につながる事、③前時までの記録や見本となる動きの映像等と比較することによって新たな課題発見や課題設定、課題解決につながる事、という共通点でした。今年度はこの「試す」「記録」「比較」の3つのキーワードを大事にしながら研究を進めてきました。[図1]



[図1] 研究構想図〈子ども〉

### 3 研究方法

研究方法は、以下の4つで行いました。

- ①理論研究→研究テーマに沿った体育科の在り方や教育や学習の本質について、対話を通して問い直す。
- ②実技研修→実技を通してその運動の特性を知り、指導・支援の手立てのポイントなどについて情報を交換し合い、理論研究との一体化を図る。
- ③授業研究→理論研究の実践の場として、年3回6本の公開授業を行い、理論を検証する。
- ④研究便り発行→体育に限らず、社会的な出来事やスポーツの話など、気になったニュースを教育現場の現状と照らし合わせて捉え直し、発行することで、校内研究の推進を支援するツールとして活用する。

### 4 本研究における実践

校内研究推進委員が中心となり、全教師での指導案検討会の実施や、研究テーマに沿った運動領域の在り方、情報発信やカリキュラム例等について協議を行いました。そして、理論研究との一体化を図る実技研修を実施する中で、その運動の特性を知り、指導・支援の手立てのポイントなどについて情報交換を行い、下の [図2] のような流れで、先生方の主体的な研究の推進につながられるようにしました。



[図2] 研究構想図〈教師〉

[授業研究会（公開授業）の様子]

#### 第1回授業研究会（公開授業）

- 2年生「ワクワクてつぼうランド」  
(鉄棒を使った運動遊び)
- 5年生「リズムを感じてハードル走をしよう」  
(陸上運動・ハードル走)



#### 第2回授業研究会（研究推進事業発表会）

- 3年生「遠くに飛ばして 得点しよう」  
(ベースボール型ゲーム・ティーボール)
- 6年生「拾ってつないでアタックチャンス」  
(ネット型・ソフトバレーボール)



### 5 2年間の研究から見える展望

本校の研究の成果として、先生方の授業を見る目が育ってきたことが挙げられます。特に参観者が『虫の目』(＝本時で固有名詞と具体の事実で見る目)で見られるようになりました。今後に関しては、本研究で設定した「試す」「記録」「比較」という視点を基に、他教科・他領域等で汎用性を高めることができるよう、一人ひとりが当事者意識をもった研究にしていきたいです。

### 6 支援教育の視点

支援教育の視点として、以下の4つを意識しました。

- ①視覚化→言葉の指示だけでなく、実際の動きを手本で見ることや、掲示物や記録カードなどで示す。
- ②焦点化→わかりやすい言葉、丁寧な言葉かけ、発問の数を少なくする。
- ③共有化→ペアやグループ活動を取り入れ、他者の考えを聞いて理解できるようにすることや見方・考え方を広げられるようにする。
- ④教具の工夫→操作しやすい道具を使用する。

以上の4つの視点を入れて、みんなが分かって、安心・安全に取り組めるようにしました。

## キャリア教育の推進に関する研究

田名中学校区(田名中学校、田名小学校、田名北小学校)

「自ら考え行動することができる児童生徒」「人の気持ちを理解し、助け合うことのできる児童生徒」を育む教育活動の展開

### 1 研究主題について

中学校区でめざす児童生徒像を「自ら考え行動することができる児童生徒」「人の気持ちを理解し、助け合うことのできる児童生徒」とし、キャリア教育の視点を意識した教育活動に取り組んでいます。田名中学校区では、児童生徒の実態や中学校区として育成したい力等を分析・整理することを通して、キャリア教育により育みたい4つの力のうち、特に「自律する力」「つながる力」に重点を置き、本主題を設定しています。

### 2 研究内容

本研究は、田名中学校区（田名小学校、田名北小学校、田名中学校）において、令和6年度から8年度にかけて推進されている実践研究です。

社会環境が急激に変化する中で、児童生徒の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力を育む「キャリア教育」の重要性が高まっています。しかし、校種ごとの取組が分断されれば、児童生徒の成長についての連続性を踏まえた指導を行うことが難しくなり、指導の効果が十分に発揮されない懸念があります。

そこで、既存の幼保小中連携・小中高連携や学校運営協議会等の枠組みを活用し、図1のように、中学校区全体で「めざす児童生徒像」と「育みたい力」、「めざす具体の姿」を明確に示しました。そうすることにより、児童生徒・保護者・地域・教職員とゴール像を共有し、義務教育9年間、さらには幼保や高校までを見通した「縦の接続」と、地域社会

と協働する「横の連携」を強化することにしました。



【図1】「めざす児童生徒像」と「育みたい力」

### 3 研究方法

研究の推進にあたっては、キャリア教育の「視点」「計画」「実践」の3つを中学校区全体で「そろえる」ことを重視しています。具体的な方法として、次の3点が挙げられます。

#### ① 推進体制の整備

「小中高連携推進協議会小委員会」や「中学校区キャリア教育推進小委員会」を定期的で開催し、各校の担当者が方針をすり合わせる場を設けています。また、小中一貫の日や校内研究の公開授業日においては、積極的に授業を公開しキャリア教育の視点で研究協議を行ったり、講師を招聘して専門的な見地から研究の価値付けをしていただいたりするなど、学校間での共通理解と意識の統一を図っています。

#### ② 小中一貫性のある「全体計画」の作成

各校で作成した「キャリア教育全体計画」を中学校区で共有するにとどまらず、小中一貫性のあるものにするため、「中学校区キャリア教育推進小委員会」ですり合わせて改善を図りました。実践の検証を行い、PDCAサイクルによる実用性ある運用をめざしています。

### ③情報発信の強化

「幼保小中連携情報交換会」などを通じて、校種を超えた情報の共有を行うとともに、「田名中学校区キャリア教育通信」(図2)を発行することにより地域や家庭に対してもその意図を広く発信し、横の連携を図っています。



【図2】 キャリア教育通信

### 4 本研究における実践

共通の基盤が整った今年度は、具体的な授業実践と交流活動をより活発化させました。

#### ①授業実践・授業研究

キャリア教育の視点を踏まえた授業づくりの具体として、教科のねらいを第一に置きながら、キャリア教育の4つの力のうち、授業で育みたい力とその場面について指導案に示す、授業の振り返り場面において育みたいキャリア教育の力に即した価値付けをするなど、キャリア教育で育みたい力を意識した具体的な授業づくりについて実践を重ねてきました。

#### ②校種間交流

児童会と生徒会による合同会議やあいさつ運動を実施し、児童生徒が主体的に関わる場面を創出しました。また、中学生が小学校を訪れて部活動紹介を行ったり、中学校教員による出前授業を行ったりすることで、小学生の中学校生活への不安解消と期待感の醸成を図っています。さらに、高校の授業公開やラウンジ展への参加、幼保との交流会など、義務教育の枠を超えた連携も進めています。

#### ③地域連携

学校運営協議会と密接に連携し、ゲストティーチャーを招いた授業や職場体験学習など、

地域社会全体を学びの場とする活動を展開しています。これらの活動の様子は「キャリア教育通信」等を通じて地域へ発信し、保護者や地域住民の理解と参画を促しています。

### 5 成果と課題

これまでの取組の成果は、全国学力・学習状況調査等の質問紙調査結果(特に自己肯定感に関わる部分)に明確に表れました。

#### 【全国学力・学習状況調査質問紙項目より】 自己肯定感・自己と周囲との関わりに関する項目でポイント増

- 「自分にはよいところがある」  
→小中ともに増加している  
(田名中：R5 78.8% → R7 86.4%)
- 「人が困っている時には進んで助けていますか」  
(田名北小：R5 89.6% → R7 95.0%)
- 「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」  
(田名小：R5 71.6% → R7 82.1%)

今後も、日常の教科等の授業づくりにおいて、キャリア教育の視点による授業実践のさらなる質的向上を図るとともに、保護者を含めた地域全体とより一層協働し、家庭・地域・学校が一体となって児童生徒を育てる教育活動を展開していく必要があると考えています。

### 6 支援教育の視点

本研究で掲げた「自律する力」と「つながる力」の育成は、支援教育において重要視される「自立と社会参加」の理念と重なります。特に、「自分のよさや長所を生かす」という視点は自己肯定感を高める上で極めて重要です。

また、「人の気持ちを理解し、助け合う」姿を中学校区でめざすということは、多様な他者を受け入れ、違いを認め合うインクルーシブな学校風土の醸成につながります。困っている友人に自然と手を差し伸べる関係性が構築され、社会の中で共に生きていくための基礎的な力を育む土台となっていくと考えます。

# 学習指導・評価の充実に関する研究 外国語 相模台小学校

「相手のことを知りたい、相手に伝えたい」と思える授業づくり  
～読んだり書いたりする活動を通して～

## 1 研究主題について

相模台小学校には、外国籍児童や外国につながる児童が多く在籍しており、そのような国際色豊かな環境にいる児童たちは、授業を通して外国語での会話に親しみをもって取り組んでいます。本校でのこれまでの研究を踏まえ、今年度は「言語の違う国の人と関わりたい」「相手のことを知りたい、自分のことを相手に伝えたい」という根本的な思いを軸にして、研究を進めています。

## 2 研究内容

仮説：外国語を「読む、書く」活動を軸に、相手意識をもたせる場面を設定することで、児童は外国語でのコミュニケーションに意欲的に取り組み、他者の考えに触れながら、相手の考えを受け止めたり、自分の意図を正確に伝えたりする力が向上するだろう。

相模台小学校では、次の視点を意識して、本研究を進めています。

- ① 児童の活動意欲を引き出す目的・場面・状況等の設定の工夫（相手意識をもつ）
- ② 中間指導の充実
- ③ 「読むこと」「書くこと」の指導の仕方を考える。
- ④ 各領域で小学校6年間の学習のつながりを意識した計画、教材教具の研究
- ⑤ 個別の学びをサポートする教材教具の研究

今年度、1月時点で5回の公開授業を実施しました。それぞれの授業では、研究テーマに迫るために、上記の視点から3つ選択し、公開授業後は、低学年、中学年、高学年に分かれて研究協議をし、視点をふまえた授業展

開や子どもたちの取組について熱心に分析しました。また、市内の先生方にも授業を参観

していただいたり、文部科学省の早川優子教科調査官をはじめ、大学教授のご

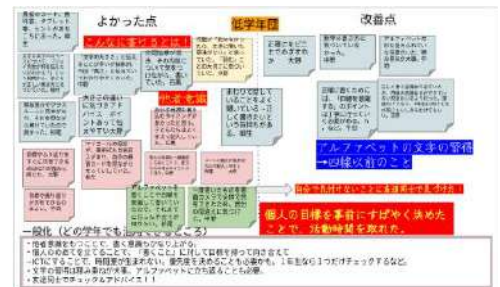
講演を通して、幅広い意見をいただいたりしながら、研究を進めています。

## 3 研究のこれから

今後は、外国語を通して身に付いた資質・能力をもとに、子どもたちが何に気付いていくことができるのかを軸に、研究を進めていきたいです。これまでの授業を通して、子どもたちが何のために読んだり、書いたりするのかを理解し始めてきました。そこに教師による働きかけを加えることで、言語面や内容面において、子ども自身が改善点に気づき、外国語を使って相手に「もっと伝えたい」という気持ちが育まれていくと考えています。

## 4 支援教育の視点

英語が「読めない」「書けない」という悩みは小学校や中学校のどこにでもあり得る課題です。イラストやスライドなどの視覚教材を活用したり、モデルを見せたり、また、子どもが実際に外国語を使ったりすることを通して、文字とのつながりを認識することは、学習支援の視点でも有効なポイントです。単元を通して資質・能力を身に付けるために、「できるようになった」という小さな達成感を子どもたちが感じることが出来る場面を、授業の中で設定していきたいです。



【協議で出た意見はスライドに集約】

## 学習指導・評価の充実に関する研究 音楽 鶴園小学校

### なりたい自分になるために つながる力を高める子

～たのしんで表現する活動を通して～

#### 1 研究主題について

鶴園小学校では、「なりたい自分になるために つながる力を高める子」を研究主題に掲げ、音楽科を通じたウェルビーイングの向上とキャリア教育を推進しています。児童自ら「やってみたい」と主体的に行動し、仲間と共に達成感を得ることが、よりよく生きる喜びにつながると考えています。音楽科には合唱、合奏など、仲間と合わせることが欠かせません。「つながる力」を育み、そこで得た経験を他教科等や行事でも活用できるようにしています。

#### 2 研究内容

研究主題のねらいを達成するため、各学年で年1回研究授業を設定しています。

今年度は、「なりたい自分になるために」次の2つについて実践を重ねました。

##### ①自己肯定感の向上と羞恥心の緩和

自分の思いを仲間に伝えたり、つなげたりするために、「心の解放」が重要だと考えています。音楽は「音程が外れたら・・・」「リズムが違ったら・・・」と表現の技能において不安になることがよく見受けられます。

常時活動で行った「かぶらずドレミ」では、「ドレミの歌」の旋律をフレーズ毎に分け、自分の歌いたい部分を選びます。歌うフレーズ部分だけ立ち上がり、一人で歌うことができれば、その子の勝ちとなります。音程など関係なく、一人でできるという自己肯定感を高めることをねらいとしました。一人で歌ったら負けではなく、周りから称賛されること

で羞恥心を少しでも緩和できる場づくりを意識しました。

写真【大舞台上で旋律を選び堂々と歌う子どもたち】



##### ②なりたい自分になるための「自己選択」

一方的な指導に終始せず、児童が自ら選択できる環境を整えました。「どのパートで歌いたいのか」「どの楽器で目標を達成したいのか」など、主体的に判断ができるようにすることで、学びの当事者意識を高めました。こうした試行錯誤のプロセスこそが「なりたい自分」を実現する鍵になると考えました。

#### 3 研究のこれから

学年や発達段階に応じた教師の「働きかけ」と、児童が仲間と「関わり合う姿」に着目し、具体的な支援や価値付け、言葉かけの在り方・発問をより精選していきます。「なりたい自分」に近づくために、教師の言葉を精選することが、さらなる研究推進になると考えています。

#### 4 支援教育の視点

鶴園小学校は音楽科の研究を通して、児童の細やかな変容を見逃さないことを大切にしています。音は一瞬で消えてしまうからこそ、教師は児童の表現や表情を鋭く見取らなければなりません。この視点を全教科に共通する支援の根幹に捉え、視覚的・身体的な手立てなども講じながら、全ての児童が理解しやすい授業づくりを推進しています。

## 学習指導・評価の充実に関する研究 学習評価 相模丘中学校

### 生徒の学習意欲を高め、アウトプット力の向上を導く授業づくり

#### ～指導と評価の一体化をめざし、単元を見通した授業実践の取組～

#### 1 研究主題について

相模丘中学校では、「指導と評価の一体化」を図るために、教師が授業の中で自らの指導や生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かすことをねらいとして、校内研究を進めています。特に、過去3年間の研究では、授業を通して資質・能力が育成され、目標を達成している具体的な姿（めざす姿）を「アウトプットさせたい姿」、それを生徒が実現することを「アウトプット力」として授業実践に取り組みました。

#### 2 研究内容

令和7年度は、さらに学習意欲を高めることに重点を置き、「生徒の学習意欲を高め、アウトプット力の向上を導く授業づくり～指導と評価の一体化をめざし、単元を見通した授業実践の取組～」としてさらに研究を進めています。本研究では、次の4点を重点として授業を実践しました。

#### 相模丘中学校 研究の重点

- ① 授業者が単元・授業の目標に対し「めざす姿(アウトプットさせたい姿)」をイメージできている。
- ② 生徒が自ら学びに向かうために、生徒の学習意欲を高める方策がある。
- ③ 単元計画・授業において「めざす姿(アウトプットさせたい姿)」の達成に向けた十分な学習活動がある。
- ④ 生徒が他者との協働を通じて自らの考えを振り返る場面がある。

また、学習意欲を高めるための手立てとして講師を招聘し、「ARCSモデル」について学びました。



【図1：キャリアの垣根なく自由に授業について語り合える】

#### 学習意欲を高める「ARCSモデル」の活用

「ARCSモデル」とは、

- A 注意 (Attention) 新奇性や不思議さで興味を引き変化のある授業で関心を維持する。
- R 関連性 (Relevance) 学習内容が生活や他教科、既習事項とどう繋がるかを示し、やりがいを感じさせる。
- C 自信 (Confidence) ゴールを明確にし、成功体験を積ませることで「やればできる」という期待感を抱かせる。
- S 満足感 (Satisfaction) 称賛や公平な評価、学んだことの活用機会を提供し、「やってよかった」と思わせる。

と示されています。生徒の実態や単元・題材全体の見直しをもち、意図的・計画的に「ARCSモデル」を実践していくことで、生徒の学習意欲の向上につなげるための授業づくりを行いました。

#### 3 研究のこれから

本年度は、この「ARCSモデル」を意図的に取り入れながら、単元・題材のアウトプットさせたい姿を教師がイメージして授業を実践しています。次年度はさらにそれを資質・能力の育成につなげていきます。

#### 4 支援教育の視点

相模丘中学校の校内研究の特色として、生徒とともに公開授業を振り返る、「授業検討会」が挙げられます。生徒とともに授業を作りあげるといふ風土は、生徒の目線に立って、すべての生徒が理解しやすい授業づくりにつながります。



【図2：生徒とともに授業を振り返る「授業検討会」】

## 主権者として求められる力の育成に関する研究

吉田 耕一郎(上溝南小学校)

菊地 佑介(旭小学校)

大岡 美来(麻溝台中学校)

武川 偉瑠(中沢中学校)

大橋 佳子(教育センター)

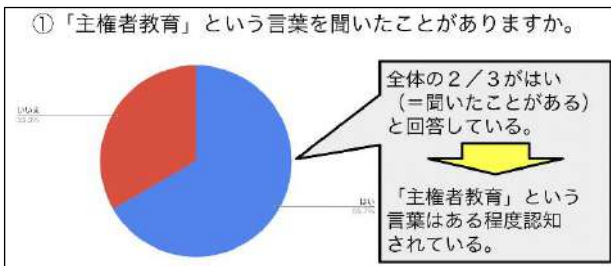
村井 啓人(教育センター)

### 1 課題意識

選挙権年齢及び成年年齢の引下げにより、「主権者として求められる力を育成する教育」(以下「主権者教育」という。)がこれまで以上に求められるようになりました。

みなさんは、「主権者教育」という言葉から、どのようなイメージを想起するでしょうか。

研究員が所属する小・中学校の教職員を対象とした「主権者教育」についてのアンケートでは、「『主権者教育』という言葉聞いたことがありますか。」という質問に、66.7%の職員が「はい」と回答しており、「主権者教育」について一定の認知がされていることが分かります。[図1]



[図1] 主権者教育についてのアンケート

また、「『主権者教育』にどのようなイメージを持っていますか？」という質問から、主権者教育は、特別な政治教育と捉えられがちであること、社会科の授業を通して行ったり、特に中学校の公民の授業の中で実施したりすることであるというイメージが強いことが分かりました。

しかし、「小・中学校向け主権者教育指導資料『主権者として求められる力』を子供たちに育むために」(文部科学省初等中等教育局教育課程課)は、「主権者として求められる力」を、単なる知識習得に留めず、「事実を基に多面的・多角的に考察し、公正に判断する力」「合意形成する力」「社会の形成に主体的に参画しようとする力」と定義しています。

### 2 研究内容・方法

そこで、本研究では、特定の教科の実践に限らず、教育活動全体を主権者教育の視点をもって見つめ直すこと、そして、学校生活における他者との関わりを積み重ねていくことで主権者としての力が育成されると

考え、研究テーマを「自分たちで考え、判断し、行動し、社会の課題に向き合う児童生徒の育成」としました。

これまで児童生徒は家庭環境や地域社会との関わり等、生活を通して主権者として一定の土台を築いていると考えます。さらにその上に、社会科や学級活動、総合的な学習の時間に限らず、あらゆる主権者教育の視点をもった教育活動を推進すること、そして、学校生活における他者との関わりを積み重ねていくことでより一層「主権者として求められる力」が育成されると考えました。また、学校の教育活動に限らず、日々の生活の中で、地域での活動や児童生徒の身の回りで行った課題と関わっていくことも、重要な要素であると言えます。(図2)

児童生徒の学びが積層し、まるで、雪だるまのように、人生の中で時間をかけて少しずつ「主権者に必要な力」が醸成されていくものであり、だからこそ児童生徒の発達段階やその実態に合わせて、日々の教育活動の中で様々な機会を捉えて実施していく必要があると考え、研究を進めてきました。



[図2] 主権者として求められる力の育成 イメージ図

### 3 研究実践

事例1:小学校社会科

キーワード:社会課題との関わり/選択肢をもとに自分の立場を表明する/児童の思いを社会の中で実現する

吉田総括教諭の実践では、小学校第3学年の社会科で扱う、自分たちの相模原市についての学習を中心に、地域の課題に対して、より『自分ごと』として捉えられるようにしました。例えば、地元のスーパーマーケットや他業種の企業と連携して商品の企画をすることを通して、自分の考えをもつことが社会の課題の解決につながることを



実感できるようにしました。

また、第4学年では、「自然災害にそなえるまちづくり」について自分ごととして考えられるように「マイタイムライン」を活用しながら話し合い、実際に自分たちの生活する地域の課題に対して自分自身が考える必要性を実感できるようにしました。

**事例 2:小学校国語科／総合的な学習の時間／特別活動**

キーワード:根拠をもとに自分の立場を表明する／物事に自分ごととして参画する／自分たちの思いを実現する

菊地教諭の実践では、小学校第3学年・5学年の国語科の特に「A 話すこと・聞くこと」に関連する単元において、総合的な学習の時間や特別活動と関連付けた実践を行いました。「わたしの町のよいところ」や「よりよい学校生活のために」の話し合う活動を通して、結論を出すことだけを目的とするのではなく、思考ツールの活用や話し合いのルールを共有するなどして、多様な意見を出し合い、時には対立しながら、自分の立場を表明して『合意形成』し、互いの考えを尊重し結論を導き出そうとする過程を経験することが、主権者として重要な学びとなるように研究を進めました。

**事例3:中学校社会科／総合的な学習の時間**

キーワード:教科横断的な学習／社会の様々な事象を自分ごととして捉える／他者の考えも踏まえて折り合いをつける

大岡教諭の実践では、中学校第2学年の地理の授業で「中国・四国地方」の過疎化による問題を扱いました。多くの生徒にとって「遠く離れた地域で子どもたちの自分ごとにならない」課題に対し、この実践では「相模原」という身近な視点から捉え直しました。生徒たちは、相模原市が実際に策定した「相模原市総合計画」の中間地対策の資料をもとに、どの施策が有効かを議論し、一見自分とは関係の薄い社会問題が、自らの住むまちの未来を考えるために必要な学びであることを実感できるようにしました。また、総合的な学習の時間と関連付けて「相模原市に人が来てもらうためにはどうしたらよいか」というテーマで本市のシティプロモーション戦略課の担当者に発表する機会を設け、自分たちの意見が社会に認められる場を作

ることで、社会で起きていることを『自分ごと』として実感できるようにしました。

**事例4:中学校社会科**

キーワード:過去・今の学びを自分ごととして捉える／社会参画への意欲の醸成する

武川教諭の実践では、中学校第2学年の「明治維新」を学習する際には、当時の武士や外国人や庶民などの様々な立場に立って考える活動を取り入れ、物事を多角的に考えるとともに、『折り合い』をつけていくことはどういことなのかを自分ごととして捉えられるようにしました。中学校第3学年の公民の学習では、授業の終末に「今の私、もしくは未来の私が社会の一員としてできることは何だろう」という問いについて考えられるようにすることで、主権者教育に関連する知識の習得にとどまらず、主体的に社会の課題に関わろうとする意欲の醸成につながるようになりました。

**4 成果と課題**

本研究を通して見えてきたことは、「主権者教育」は「特別なことではなく、多くの教師が『もうすでにやっている』実践に価値付けをすることだ」ということです。自分の考えがもてるようにすること、他者と折り合いをつけて合意形成すること、そしてそれを実現していくために考えを表明し、その行為に価値付けることは、日々の教育活動の中で行われてきたことです。しかし、それを意図的・計画的に実施し、価値付けるとともに、一人ひとりの思いや願いが大切にされている環境を整えていくことも重要です。今は、学級や学年、学校の単位であっても、この「主権者に求められる力」が発揮され、自らが未来の社会において「主権者」として実現していくことを願ってやみません。

**5 「支援教育」という視点で**

「主権者教育」の実践と考え方は、多様な背景をもつすべての子どもたちの学びに生かすことができます。発言だけに頼らず、付箋やワークシートへの記入など、自分のペースで考えを表現できる機会を保障したり、教師が一人ひとりの小さな意見や変化を見逃さず、価値付けをして本人や周囲に伝えることで、児童生徒は自信がもてるような経験を積み重ねることができます。それはすべての児童生徒が、多様な他者と共に生きる社会の一員として尊重され、安心して自らの意見を表明し、主体的に学びに向かうための土台作りそのものです。この土台の上こそ、「主権者として求められる力」が育まれていくと考えられます。

## 相模原市立中野中学校区 ー未来の学び創造への挑戦ー

急速なデジタル化が進む現代社会において、学校教育もまた大きな変革の時を迎えています。中野中学校区3校は文部科学省より「リーディング DX スクール」、中野中学校は「生成 AI パイロット校」の指定を受け、ICTと生成 AI を効果的に活用した「新しい学び」の創造に果敢に挑戦しています。ここでは、中野中学校区での取組と中野中学校の取組を紹介します。

### 【リーディング DX スクール事業と生成 AI パイロット校事業】

(リーディング DX スクールホームページ <https://leadingdxschool.mext.go.jp/>)

「リーディング DX スクール事業」は、GIGA スクール構想で整備された端末とクラウド環境を、全国の学校が十全に活用するためのモデルケース創出を目的としています。中野中学校区はこの指定校として、特別なソフトウェアに頼らず、標準仕様の汎用ツールを「普段使い」することで、情報活用能力の育成や個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実をめざしています。どの学校でも再現可能な実践事例を積み上げ、全国へ発信することが同校区の重要な役割です。

「生成 AI パイロット校事業」は、教育現場における生成 AI の先行的な活用を通じ、効果的な実践事例の創出を行う文部科学省の取組です。指定3年目を迎える中野中学校では、明確な目的意識を持った「活用」へとフェーズを移行させています。生成 AI を安易な検索ツールではなく、生徒の思考を深めるためのツールとして位置づけ、最先端の知見を蓄積しています。

#### 1. リーディング DX スクール事業

##### 中野中学校区の取組

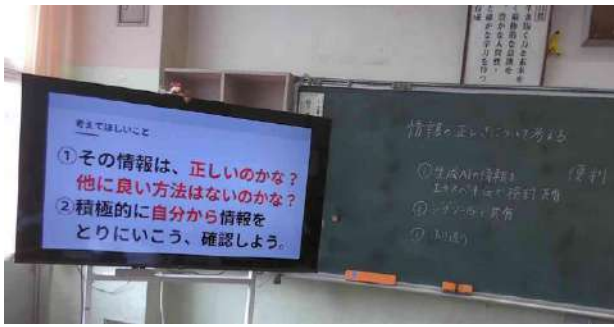
校区内の学校と連携し「小中一貫」の視点をもって取り組んでいます。中野中学校、中野小学校、津久井中央小学校の3校は、9年間を通じた児童生徒の学びの連続性を重視し、「学びのスタンダード」という協働学習システムを共有しています。今年度は、夏の「小中一貫の日」において、3校の教職員が一堂に会し、ICT 活用の合同研修を行いました。ここでは、デジタルホワイトボードの活用方法について、実践的なワークショップを行いました。小学校段階から、自分の考えをデジタルの付箋に書き出し、友だちの意見と分類・整理したり、関連付けたりする経験を積むことは、中学校でのより高度な探究学習へのスムーズな接続を可能にします。教職員同士が校種を超えて ICT 活用のノウハウを共有し、「どのように使えば子どもたちの学びが深ま

るか」を議論する場をもつことで、中学校区全体の教育力向上をめざしています。

#### 2. 生成 AI パイロット校事業

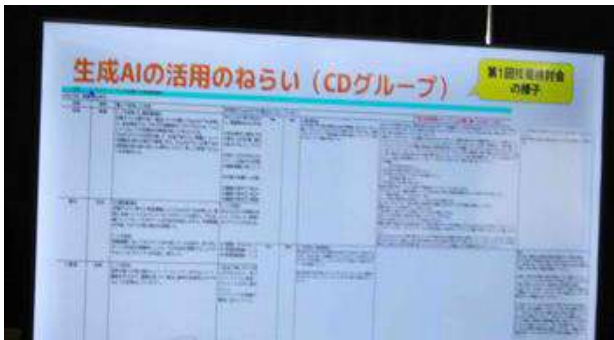
##### 中野中学校の取組

中野中学校におけるリーディング DX スクール・生成 AI パイロット校の取組は、3年目を迎え新たなステージへと移行しています。今年度の最大の焦点は、「AI リテラシーを高めるカリキュラム構築」への挑戦です。中野中学校では、総合的な学習の時間を活用し、体系的に情報リテラシーを育成する「情報の授業」をカリキュラムに組み込みました。ここで生徒たちは、生成 AI の仕組みや特性、倫理的な課題について深く学びます。そして、この情報の授業で培われた基礎力をベースとして、他教科等の授業でも日常的かつ効果的に生成 AI を活用する「教科横断的な学び」へと接続させています。



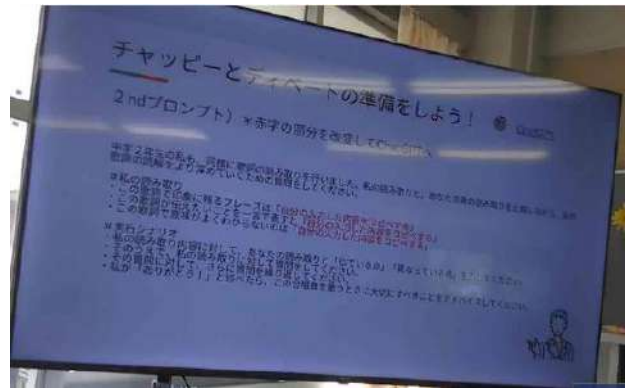
[写真1:情報の正しさについて考える授業]

中野中学校では、生成 AI 活用の目的を[A. 課題解決・対話的学習、B. 多面的な見方、多角的な考え方、C. メタ認知、D. 個別最適化、E. 語彙力・表現力の育成、F. 文章添削・校正・評価] 6つのカテゴリーに分類しています。各教科で「何のために生成 AI を使うのか」を明確にし、授業設計を行っています。



[写真2:生成 AI 活用のねらいに沿った授業検討の様子]

授業実践においては、教師が意図的にデザインした「プロンプト (AI への指示文)」が重要な役割を果たしています。生徒が AI と対話する中で、単に答えを得るのではなく、より深い思考へと誘われるような仕掛けが各教科等の授業設計に組み込まれています。これは、ICTを単なる道具として使う段階から、より本質的な教育 DX へと進んだ姿と言えます。現在、同校ではこれらの成果を公開授業研究会等で発信し、「深い学び×生成 AI」の可能性を広く提示しています。



[写真3:授業で生徒にプロンプトを提示]

特筆すべき、教育 DX の取組は「教師の授業 0 時間目」です。授業をシミュレーションするプロンプトを活用し、教師は生成 AI が演じる架空の生徒を相手に模擬授業を行います。実際の授業 (1 時間目) の前に、AI 相手に発問や展開を試行錯誤 (0 時間目) することで、教師の授業デザイン力や対応力を高めています。

### 3. 今後の展開

中野中学校の挑戦は、一中学校区を取組にとどまるものではありません。今後は、これらの実践で得られた知見や成果を、市内全域へと「横展開」していくことが期待されています。

重要なのは、ツールを使うこと自体を目的にしないという点です。「何のために ICT や生成 AI を使うのか」という原点に常に立ち返り、あくまで「生徒の学びを深めるため」「教師が子どもと向き合う時間を生み出すため」という目的をぶれさせないことが、普及の鍵と考えます。

中野中学校が切り拓いた道は、これからの相模原の教育、ひいては日本の教育のスタンダードとなっていく可能性を秘めています。そこには、テクノロジーと人間味あふれる対話が融合した、学校の姿がありました。

# さがみはら教育

No.170

## Back Number List

号数	特集の内容	発行年月日
170号	多様な教育的ニーズに応じた支援や指導のあり方	令和8年3月
169号	教師の学びを self-change!!	令和7年3月
168号	「学び続ける教師」とは？	令和6年3月
167号	子どもたちの可能性を引き出す学び～個別最適な学び×協働的な学び～	令和5年3月
166号	教職の魅力×教育の力	令和4年3月
165号	9年間の学びのつながり	令和2年12月
164号	新学習指導要領の実施に向けて	令和元年12月
163号	始まるよ プログラミング教育	平成30年12月
162号	一人ひとりが大切にされる教育～子どもを取り巻く状況から考える～	平成29年12月
161号	アクティブ・ラーニングを探る～資質・能力をはぐくむ授業づくり～	平成28年12月

### 【バックナンバー格納場所】

相模原市教育センターホームページ>さがみはらの研究>さがみはら教育>バックナンバー

[https://kyouikucenter.sagamihara.andteacher.jp/modules/hp\\_jpage6/index.php?page\\_parent=270](https://kyouikucenter.sagamihara.andteacher.jp/modules/hp_jpage6/index.php?page_parent=270)



## 編集後記

さがみはら教育 第170号はいかがでしたか。「多様な教育的ニーズに応じた支援や指導のあり方」という言葉のもつ重みと、そこに含まれる子どもたちの未来につながる可能性について、どのように感じたでしょうか。

現在、私たちの目の前にある教育現場は、かつてないほど多様性に富んでいます。統計によれば、全国の特別支援学級に在籍する児童生徒数は直近10年間で2倍以上に増加し、外国にルーツをもつ子どもたちも急増しています。また、不登校やその傾向にある子、あるいは一斉授業の中で学びのペースに葛藤を抱える子や、学習内容につまずきを感じている子など、子どもたちが抱える背景や課題は千差万別です。こうした一人ひとりの異なる教育的ニーズを的確に把握し、その可能性を最大限に引き出す教育の実現が、今まさに求められています。

特集では、長年本市の支援教育に携わってこられた玉川大学の安藤正紀先生より、ご寄稿をいただきました。安藤先生は、学校の中だけで閉じた教育ではなく、「助けたり、助けられたりする」インクルーシブ社会の実現が先決であることを説かれています。特に、子ども自身が「自分の学び方」を発見し、自己理解を深めることで「助けられ上手」になるという視点は、これからの共生社会を生き抜く子どもたちにとって欠かせない力となります。安藤先生の温かな視点とご教授いただいたことは、日々の実践に悩む私たちに、子どもに寄り添うことの本質を再認識させてくださいました。

あわせて本号では、大野南中学校分校の取組、今年度新設された支援教育課や教育相談課、そして各校の研究実践を紹介しました。支援や指導の正解は一つではありません。しかし、ユニバーサルデザインの視点、生成AIやICT活用を取り入れた授業改善など、新しい手立てを学び、視点を増やすことで、子どもたちが未来を切り拓く鍵は見つかるのではないのでしょうか。現場の先生方が日々、子どもたち一人ひとりの学びに寄り添うために、研究や取組を進めている姿からは、子どもたちを支援する学校・教育委員会が一体となって、考え方をアップデートしていく必要があるというメッセージをいただいた気がしました。

本誌が紹介した様々な視点や手だてが、先生方の実践を振り返り、明日からの子どもたちとの関わりを照らすヒントになれば幸いです。

最後に本号の編集に際し、原稿執筆及び写真提供等にご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

ホームページアドレス <https://kyouikucenter.sagamihara.andteacher.jp/>

※本冊子の無断引用・転載・複写を禁じます。

2026年（令和8年）3月 発行  
発行 相模原市教育委員会  
編集 教育局学校教育部教育センター  
〒252-0239  
相模原市中央区中央 3-12-10  
電話 042（756）0290

